慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジャック・デリダの死刑論を多方面から包括的に検討する研究
Sub Title	Thinking death penalty with Jacques Derrida
Author	高桑, 和巳(Takakuwa, Kazumi)
Publisher	慶應義塾大学
Publication year	2018
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2017.)
JaLC DOI	
Abstract	フランスの哲学者ジャック・デリダの1999–2000年度講義録『死刑[I]』の刊行(白水社, 2017年)を承けて(研究代表者が翻訳), デリダの思想を, また死刑存置論の全体を, あらためて考察しようというのが本研究のねらいである。 そのために, 2017年10月7日に「デリダと死刑を考える」と題したシンポジウムを開催した(10時半から18時過ぎまで)。会場は日吉キャンパス来往舎2階大会議室である。開催にあたっては, 資金上は「学事振興資金」に全面的に頼った。開催の実際にあたっては「教養研究センター」の「後援」を受けたほか(具体的にはポスター作成など学内を中心とした広報), 「アムネスティ・インターナショナル日本」「脱構築研究会」「白水社」の「協賛」を得た(ネット上をはじめとする広報にご協力いただいた)。 当日は70名ほどの聴衆に恵まれた。 登壇者は, 研究代表者(司会)のほか, 登壇順に, 石塚伸一(龍谷大学法学部教授), 鵜飼哲(一橋大学大学院言語社会研究科教授), 梅田孝太(上智大学ほか講師), 江島泰子(日本大学法学部教授), 郷原佳以(東京大学大学院総合文化研究科准教授), 福田真希(リール第2大学連携研究員), 増田一夫(東京大学大学院総合文化研究科教授)であった。登壇者は, おのおのの研究分野(刑法学, 法制史, フランス文学, ドイツ哲学, フランス哲学, フランス文学, ヨーロッパ地域文化研究, およびそれらの複合領域)から『死刑[I]』を読み, それぞれ30–60分程度の発表をおこなった。 多様な観点から, デリダによる「死刑存廃論の脱構築」の全体像を捉えなおすことができ, また, 死刑廃止論の今後に対する見通しと困難さとを確認することができた。 この重要な成果を広く世に問うためにも, このシンポジウムを出発点として, 同名(仮題)の論文集をまとめ, 刊行することにしている(白水社, 2018年(予定))。 We held a symposium entitled "Thinking Death Penalty with Derrida" on October the 7th 2017, with Kazumi Takakuwa (chair), Shinichi Ishizuka, Satoshi Ukai, Kouta Umeda, Yasuko Eshima, Kai Gouhara, Maki Fukuda and Kazuo Masuda.
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2017000001-20170114

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2017年度　学事振興資金（個人研究）研究成果実績報告書

2017年10月25日

研究代表者	所属	理工学部	職名	准教授	補助額	300 （A） 千円
	氏名	高桑 和巳	氏名（英語）	Kazumi TAKAKUWA		

研究課題（日本語）

ジャック・デリダの死刑論を多方面から包括的に検討する研究

研究課題（英訳）

Thinking Death Penalty with Jacques Derrida

１．研究成果実績の概要

フランスの哲学者ジャック・デリダの1999-2000年度講義録『死刑[I]』の刊行（白水社、2017年）を承けて（研究代表者が翻訳）、デリダの思想を、また死刑存置論の全体を、あらためて考察しようというのが本研究のねらいである。
そのために、2017年10月7日に「デリダと死刑を考える」と題したシンポジウムを開催した（10時半から18時過ぎまで）。会場は日吉キャンパス来往舎2階大会議室である。開催にあたっては、資金上は「学事振興資金」に全面的に頼った。開催の実際にあたっては「教養研究センター」の「後援」を受けたほか（具体的にはポスター作成など学内を中心とした広報）、「アムネスティ・インターナショナル日本」「脱構築研究会」「白水社」の「協賛」を得た（ネット上をはじめとする広報にご協力いただいた）。
当日は70名ほどの聴衆に恵まれた。
登壇者は、研究代表者（司会）のほか、登壇順に、石塚伸一（龍谷大学法学部教授）、鵜飼哲（一橋大学大学院言語社会研究科教授）、梅田孝太（上智大学ほか講師）、江島泰子（日本大学法学部教授）、郷原佳以（東京大学大学院総合文化研究科准教授）、福田真希（リール第2大学連携研究員）、増田一夫（東京大学大学院総合文化研究科教授）であった。登壇者は、おのおのの研究分野（刑法学、法制史、フランス文学、ドイツ哲学、フランス哲学、フランス文学、ヨーロッパ地域文化研究、およびそれらの複合領域）から『死刑[I]』を読み、それぞれ30-60分程度の発表をおこなった。
多様な観点から、デリダによる「死刑存廃論の脱構築」の全体像を捉えなおすことができ、また、死刑廃止論の今後に対する見通しと困難さとを確認することができた。
この重要な成果を広く世に問うためにも、このシンポジウムを出発点として、同名（仮題）の論文集をまとめ、刊行することにしている（白水社、2018年（予定））。

２．研究成果実績の概要（英訳）

We held a symposium entitled “Thinking Death Penalty with Derrida” on October the 7th 2017, with Kazumi Takakuwa (chair), Shinichi Ishizuka, Satoshi Ukai, Kouta Umeda, Yasuko Eshima, Kai Gouhara, Maki Fukuda and Kazuo Masuda.

３．本研究課題に関する発表

発表者氏名（著者・講演者）	発表課題名（著書名・演題）	発表学術誌名（著書発行所・講演学会）	学術誌発行年月（著書発行年月・講演年月）
石塚伸一	（死刑廃止運動の実際とデリダの死刑論）	デリダと死刑を考える	2017年10月7日
福田真希	デリダにおける恩赦	デリダと死刑を考える	2017年10月7日
江島泰子	ヴィクトール・ユゴーの死刑廃止論、そしてバダンテール：デリダと考える	デリダと死刑を考える	2017年10月7日
梅田孝太	デリダの死刑論とニーチェ	デリダと死刑を考える	2017年10月7日
増田一夫	死の脱構築：有限性の終焉としての死刑	デリダと死刑を考える	2017年10月7日
鵜飼哲	ギロチンの黄昏：デリダ『死刑Ｉ』のなかのジュネとカミュ	デリダと死刑を考える	2017年10月7日
郷原佳以	ダイモーンを黙らせないために：デリダにおける「アリバイなき」死刑論の探求	デリダと死刑を考える	2017年10月7日